

どうも日本総大将と英雄の父で、トレーナー
です

無課金チャレンジャー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

辛い過去を持ち、「お前が名前を残すのは墓に入る時だけだ」と罵倒された男が居た。しかし、その男は挫けず前を向きアメリカでの二冠を達成したあと日本に向かう。そして彼は日本の競馬を文字通りに変えて名を残す。

娘は日本総大将、息子は英雄。教え子は全員、優秀。

これは日本競馬の勢力図を変えちやつた男とその子供達、そして教え子のお話。

なお、選手時代はヤンチャだった模様

目次

プロローグ	1
その男：サンデーサイレンス	6
後の日本総大将と英雄であった	11
チームスピカ	19
楽しいC組の仲間達	26
先生、走りたいです	32
迫るデビュー	40
幕間 勝負服を頼むお父ちゃん	49
メイクデビュー	54
変人記者とただ1人の親友	61
次期新入生、予約しまくす	67
初めての大一番!!	74

プロローグ

中央競馬場。その観客席にはビッシリと観客で埋っており、観客の皆様は心を踊らしてその時を待つ。いや、観客席に集まった人だけではない。運良く観客席に入ることが出来た彼等だけではなく、観客席に入ることが出来なかった人達も同じだ。ある人は自宅のテレビを見て、またある人は飲食店や家電売場のテレビを眺める。ある人は仕事の中とは言え仕事を中断してテレビを見る。だけど誰もが咎めない。当然だ、今日は最高のレースで最速が決まるその時なのだから。

「今日、決まるんだ」

テレビ越しの人も観客席に集った人も心は同じ。最速の誕生をこの眼で観るために、その時を待つ。

『さあ、いよいよ始まりです!! URAファイナル決勝!! 最速のウマ娘が…最速の娘が決まります!!』

『最速の男かも知れませんが』

これより始まる宴はURAファイナル。トレセン学園と呼ばれる学園のチビツ子理事長が考案した、日本最高峰のレース。集ったのは日本でも最速クラスの精鋭達であ

り、その精鋭達でも勝ち抜いたウマ娘達が頂点を目指して争うのだ。集ったのは18名の最速を証明するウマ娘達であり、この中から真の最速が誕生する。

予選、準決勝と無事に勝ち進んだ精鋭18名はターフに威風堂々と立ち、人々の注目を集める。その18名のウマ娘（内1人男の娘）は勝負服と呼ばれる特別な衣装を纏い、準備はバッチリだ。

『中でも注目すべきはサンデーサイレンスの実子2人は勿論のこと、サンデーサイレンスから教えを受けたスピカの面々ですね』

『そうですね。チームスピカ最速は世界を制す。気になるチームスピカの最強も今日、決まるわけですからね』

『URAFファイナルより、世界挑戦を選んだウオツカ選手が居ないのは残念ですね』

実況者と解説者は言った。チームスピカ：そのチームはとある男のウマ娘がトレーナーを務めるチームであり、最初はそこまで注目されて居なかった。だが、今は違う。チームリギルやチームシリウスと違い、人数は少ない。だが、それでも日本の頂点に立つチームだと言えるだろう。

『ではチーム紹介に移りましょう。まずはエントリーN.O. 1、チームリギルのリーダーであるグラスワンダー!!』

そしていよいよ、チーム紹介が始まった。先ず最初に呼ばれたのはスピカに匹敵する

チームの1つ、チームリギルのリーダーであるグラスワンダーだ。

『そしてNo. 2、チームシリウスのリーダーであるハッピーミーク!!』

その後も紹介は続いていき、いよいよ彼女達の紹介である。当然、このURAFアイナルを観る人々は彼女達の紹介を待っていた。

『では、いよいよ…彼女達の紹介に移りましょう!!』

実況が叫び、まだレースが始まっていないとは言え観客のボルテージは最高に高まっていく。紹介は不要だ、何故ならこれから紹介される残りの選手は知らない方が恥だと言う程の選手達なのだから。その選手達は全員が同じチームに所属しており、歴史に名を刻む伝説の名馬でもあるのだから。

『先ずは彼女から。朱き女王…ダイワスカーレット!!所属はチームスピカ!!』

その名前が呼ばれ、観客席から大きな歓声が上がった。名前を呼ばれた少女は観客席の方に向かって手を振る。その少女は長いツインテールの髪をしており、何がと言わないが大きく多くの男性が黄色い歓声を挙げていた。

『そして、前年度の有馬記念を制した、砕けない宝石の名を持つ姫 サトノダイヤモンド!!所属は勿論、チームスピカ!!』

次に名前が呼ばれたのは緑色の貴族風なドレスを纏った少女だ。その少女の勝負服は袖が長く、手が完全に隠れている。だが、嬉しそうに観客に向かって手を振った。

『次に紹介しますは…賞金女王!!祭りウマ!!キタサンブラック!!勿論、チームスピカ!!』
次に紹介されたのは黒い髪のショートヘアの少女であり、彼女は祭り衣装を模した
勝負服を纏っている。キタサンブラックと呼ばれた少女はニコツと笑みを浮かべると
：

「ワツシヨイ!!」

観客に向けてそう叫んだ。

『無限のスタミナ!!体格に恵まれたパワー!!黄金の不沈艦は沈まない!!年齢不詳!!ゴ
ルドシップ!!彼女もチームスピカ!!』

「このゴールドシップ様をお呼びか?ゴルシ様に任せておきな!!」

赤い勝負服を纏い、美しい白髪のを靡かせる絶世の美女。走る姿は不沈艦、黙れば
美人、口を開けば世紀のハジケリスト。それがゴールドシップと紹介された美女であ
る。

『では…後はこの3人です!!』

実況が叫び、観客は未だ紹介されていない3人を見る。紹介されていなくてもその3
人は知っている。

『異次元の逃亡者!!最強の逃げ馬!!秋の天皇賞では、世界最強の一角 チームスピカの
エースでもあるディープリンパクトの連覇を止めた唯一の存在!!サンデーサイレンス

の初めての教え子、サイレンススズカ!!』

異次元の逃亡者。その異名を誇る緑と白を基調とした勝負服を纏った女性は高らかに右手を挙げる。チームスピカ最年長の彼女は学生生活最後に大きな花を咲かせるのか。

『近代競馬の結晶!!シンボリドルフ以来の無敗の三冠馬であり世界ランク1位!!サンデーサイレンスの実子!!日本が誇る天舞う英雄!!デーブインパクト!!』

黒き翼を模したマントを靡かせ、その英雄は眼を開く。長い髪、可愛らしい顔に少し小柄な体格をした少年…女性と間違えられる程の容姿をした少年は新たな伝説を生み出すのか?

『そして最後は勿論、彼女!!祖母は生涯無敗マルゼンスキー!!弟は英雄デーブインパクト!!そして父はサンデーサイレンス!!日本総大将!!スペシャルウィーク!!』

日本一のウマ娘が此処に居る。

これは辛い過去を持つアメリカの二冠達成者とその教え子、2人の子供の数年間の軌跡。

その男：サンデーサイレンス

『なんだ？この弱そうで醜い男は。足が内側に曲がってるではないか』

『男のウマ娘だけってしか取り柄が無いな。まあ、コイツが名前を刻むのは死んで墓に入ってからだろうな』

——うるせ：何度でも言ってる。俺は絶対に諦めない。お前達のような人間になってたまるかよ。

ウマ娘は原則的に女性だ。しかし、そのウマ娘はどういう訳か男として産まれたのだ。男として産まれた事だけで奇跡に近いことだろう。だが、男は産まれた時からハンデが有った。それは足が内側に向いていた事である。これでは瞬発力を用いた走りが出来ず、尚且つ男は小柄だった。

そのウマ娘の名前はサンデーサイレンス。まだ世界は彼の名前が全世界に轟事をまだ知らない。

『なんで良くならない!!もう、私は治らないウマ娘の治療はしたくない!!』

サンデーサイレンスの内側に向いていた足は成長と共に正常に成った。しかし、彼は幼少期に命の危機に陥る。幼い時期にウイルス性の感染症にかかり、激しい下痢に襲わ

れたのだ。医師は懸命に治療を施したが、容態が良くならない事に苛立ち…治療を投げ捨てた。

『大丈夫…私は見捨てないから』

しかしサンデーサイレンスには1つの幸運が有った。それはサンデーサイレンスが暮らしていた施設の女性が看護師の資格を持っており、懸命にサンデーサイレンスの治療を続けてくれた事だ。彼女の頑張りがあつてかサンデーサイレンスは無事に命を取り留めた。

そして、サンデーサイレンスはその女性職員ことストロー婦人に引き取られ、サンデーサイレンスと改めて名付けられた。名前の意味は静かなるミサ。

だが、サンデーサイレンスがジュニアハイスクール（日本で言えば中等部）に進学する少し前。サンデーサイレンスは乗っていたバスが事故を起こし、瀕死の重症を負ってしまう。原因はサンデーサイレンスが乗っていたバスの運転手の心臓麻痺。これにより運転手はバスを運転する事が出来ず、大事故を起こしてしまった。

『なんでお前だけ生き残った!!』

『どうして…私の娘が死ななきゃならないのよ!!』

事故を起こしたバスの乗客の多くは死亡。事故で生き残ったのはサンデーサイレンス、ただ1人だけだった。しかしなんとか生き残ったサンデーサイレンスだったが事故

の怪我により選手生命がどうなるか分からなかった。しかし、幸運にもサンデーサイレンスは後遺症が一切無く無事に退院した。

——俺、生きてる意味有るんか？ポロクソに君が悪いように言われるし、事故で俺だけが生き残るし。

『産まれたには意味が有る。サンデー…君はこの国にいちやいけない。いつか、遠い安全な国に行つて』

ストロー婦人に送り出され、サンデーサイレンスはジュニアハイスクールに入学した。

サンデーサイレンスが産まれたのは現代でも差別問題が残る大国アメリカ。肌の色が違うだけで差別する人々が居る所であり、恐らくは唯一…男のウマ娘であるサンデーサイレンスも例外ではなかった。差別、偏見、事故で負った心の傷…それらは思春期のサンデーサイレンスに影を落とした。

だが…彼の快進撃は此処から始まった。

『早い!?サンデーサイレンス!!サンデーサイレンス!!今日は逃げだ!!彼は逃げ切つた!!』

『サンデーサイレンス!!最後尾からのスタート!!ですが、急加速した!!これは追い込みだ!!前は逃げ、今日は追い込みで勝利をもぎ取つた!!』

アメリカのクラシック二冠を成し遂げ、三冠目前でイージーゴアというライバルに負けた為に二冠で停まったが間違はなくサンデーサイレンスはアメリカの歴史に刻まれた。それから彼は全てのレースを1着：負けても2着で走り抜けて名馬の仲間入りを果たす。その後、約2年間の走り続けたサンデーサイレンスはジュニアハイスクール卒業と共に現役を早々に引退し、日本に移住した。彼が日本に移住してからアメリカはサンデーサイレンスの事を特に調べず、直ぐに只の名馬という認識しか抱かなかった……この時まででは。

そして……この約20年後。サンデーサイレンスの名は娘と息子、教え子達が競技者としてデビューした後に瞬く間に世界に広がる事に成るのだった。

では……サンデーサイレンスは今、何処で何をしているのか？

時は流れ約20年。サンデーサイレンスも結婚し、2児の子宝に恵まれ……最初の妻が病で亡くなり、最初の妻が死ぬ前に巡り合わせた妻の親友とんやかんやあつて再婚して子供達もそこそこ成長した頃。サンデーサイレンスは東京の府中で単身赴任しており、月に1度……多くても2度位しか妻子の所に帰れない日々を送っていた。

「よっ！お前、たしかサイレンススズカだよな？最初っから思いっきり飛ばしていけ、自分らしく行け。その方がお前は間違いないく速く走れる」

日本東京都府中にある、日本ウマ娘トレーニングセンター学園ことトレセン学園の教師兼トレーナーとして働いていた。

「えっ…でもトレーナーさんは」

「お前は どうしたい？ お前のレースを見たが…我慢してる感じだったしな。おっと…自己紹介失礼が未だだったな。俺はサンデーサイレンス…まあ、見ての通り男のウマ娘だ」

次の日曜日。彼が話し掛け、アドバイスを送った少女サイレンススズカが大差で勝利し、G1でも勝利した事が瞬く間に知れ渡った。

後の日本総大将と英雄であつた

北海道のそこそこ田舎にあるそこそこ大きな和風の家。そこがサンデーサイレンスの家である。

サンデーサイレンスは妻子と共に暮らしているが、彼はご存知単身赴任中で月に1度位しか帰れない。まあ、それでもウマ娘の身体能力(又は車)、女満別空港からの飛行機を使えば東京の羽田まで2時間で行けるのでアクセスは悪くない。頑張れば日帰りであるが、トレセン学園のトレーナーや教員も基本的には敷地内にある社宅で暮らしている事と、トレーナー業務の為に1ヶ月に1度位しか帰ることが出来ないのだ。

「お父ちゃん! 私達、トレセン学園に通えるって本当だべか?」

「オフコース。嬉しすぎて、方言が出ているぞ? まあ、申請は俺がしたから安心しろ」

居間でニンジンジュースを飲みながら、浴衣姿に成っているサンデーサイレンスは1人の少女と話していた。その少女はスペシャルウィークことスペちゃん。サンデーサイレンスと病で此の世を去った前妻の娘であり、サンデーサイレンスの長女だ。

もう1人、ディープリンパクトという息子が居ており、ディープリンパクトはスペの年子の弟。前妻の忘れ形見である2人の子供をサンデーサイレンスは前妻の親友であ

り今の妻と共に大事に育ててきた。

「まあ、トレセン学園は全寮制。ウマ娘は俺とディープ以外は原則的に女性だから形的には女子学校で、学生寮は実質的に女子寮。間違いが起きないようにお前とディープは同じ部屋に成るだろうな」

東京都府中にあるトレセン学園。トレセン学園に通うウマ娘は基本的に女の子ばかり。それ故にトレセン学園は原則的に女子校だ。男のウマ娘も通えない事は無いのだが、男のウマ娘で現在確認できるのはサンデーサイレンスとその息子であるディープインパクトただ2人のみ。そんな2人に合わせる事も難しく、トレセン学園には男子寮は存在しないのだ。

しかし、入学するならば全寮制故に男子生徒となるディープインパクトも女子寮に入ることになる。だが：何か間違いが起こる可能性もあり、姉弟であるスペシャルウィークとディープインパクトは同じ部屋に成ることに成つたのだ。勿論、部屋割りを決めたのはサンデーサイレンスと教員仲間である。

「でも、お父ちゃん。なんかトレセン学園に物凄く詳しくない？」

「まあな」

因みにサンデーサイレンスはスペシャルウィークとディープインパクトに、トレセン学園の教員兼トレーナーだとは教えてない。サンデーサイレンスからすれば子供達は

いずれ、トレセン学園に入学すると分かつており、その時に学校でバラそうと思つていたのだから。

「勿論、門限も有るから…門限迄には寮に着いとけよ?」

2週間後。羽田空港。

「ディープちゃん!此処が東京だよ!!」

「お婆ちゃんに会いに行つた時、以来だよね。お姉ちゃん」

遠路遙々、北海道から東京の大地に2人の姉妹…失礼、姉弟が降り立った。何故、姉妹と言つてしまったのかと言うと弟の方は何処から見ても女の子にしか見えないためである。しかも髪が姉と比べて背中に届く程長く、顔立ちも何処から見ても女の子なので姉妹と間違えてしまつても無理は無いだらう。

姉はスペシャルウィーク。では何処から見ても女の子な弟は誰なのか?それはスペシャルウィークの弟であり、恐らくはサンデーサイレンス以来となる男のウマ娘であるディープリンパクトである。

2人はリュックサックに入るだけの荷物を入れて、それを担いでやつて来た。当然、これから寮生活を送るので殆どの荷物は先に寮に送つており今頃は学生寮に着いて2

人の部屋に運ばれてる頃だろう。

「お姉ちゃん。此処からどう行くんだっけ？」

「たしか、トレセン学園は府中だから…」

トレセン学園は府中にある。羽田空港からは電車に乗って府中に向かい、そこからトレセン学園の最寄り駅に向かえば良いだろう。

スペシャルウィークがスマホを取り出して、羽田空港からトレセン学園への行き方を調べようとする。その時だった、彼女のスマホに突如として誰かから着信が届く。画面には『お婆ちゃん』と書かれており、スペシャルウィークは笑顔を浮かべてスピーカーモードで着信に出た。

「お婆ちゃん!!」

「えっ? お婆ちゃんなの!?!」

『ヤッホー!! スペちゃん! ディープちゃん! トレセン学園転入おめでとう』

電話の相手はマルゼンスキー。スペシャルウィークの母の母であり、言わばお婆ちゃんである。今は東京で一人暮しをしており、還暦を迎えたとは言え外見年齢は20代前半を維持している美魔女のウマ娘だ。

とは言えマルゼンスキー。彼女は素晴らしい功績を残したウマ娘であり、イギリスと日本の混血故に当時の規定で日本の三大クラシックに出場は叶わなかったが…トー

ショーボーイやテンポイントと言った歴代のウマ娘達に引けを取らず全勝無敗で現役を終えた行ける伝説なのである。

『所で2人とも未だ羽田空港?』

「はい!私達、今着いたところだよお婆ちゃん!」

『バッチグーよ!迎えに行くわ!たまたま、近くに居るの』

なんという事でしょう。マルゼンスキーは偶然にも羽田空港の近くに居ており、迎えに来てくれるのだ。

「本当!」

『モチのロンよ。愛車のランボルギーニで迎えに行くわね!』

マルゼンスキーの愛車はスポーツカーである。しかも世界的に有名なブランドの物だ。恐らく、電話しながらも愛車を運転してのだろう。何故なら電話の奥から車のエンジン音が響いている。今では便利な物で、Bluetoothを用いれば車を運転しながら電話をすることも可能なので間違いなく現在進行形で迎えに来て居るのだろう。

『駐車場に着いたから。なるはやで来てね』

マルゼンスキーお婆ちゃん。羽田空港に到着する。

「お婆ちゃん早!」

しかし、迎えに来てくれたお婆ちゃんの行為を無駄には出来ない。姉弟は早くお婆

ちゃんに会いたい気持ちを落ち着かせて、羽田空港の駐車場に向かつていった。

「2人とも！こつちよー！」

駐車場に行くと、直ぐにマルゼンスキーは見付かった。と言うか紅いランボルギーニの為か、良く目立つ。旅行シーズンでは無いためか、羽田空港の駐車場は空いており、その事も有つてか紅いランボルギーニは非常に際立っていた。

紅いランボルギーニを背景に、一切衰えていない美貌を誇る茶髪の美女なウマ娘が姉弟を待っていた。彼女こそはマルゼンスキー。全勝無敗であり、かつて伝説を作り出したスペシャルウィークのお婆ちゃんである。

「お婆ちゃん!!」

「スペちゃんもディープちゃんも大きくなったわね！お婆ちゃん、嬉しいわ!!ほら、乗って。送っていくわ」

大好きなお婆ちゃんに言われ、スペシャルウィークとディープインパクトはランボルギーニに乗り込む。勿論、運転席はマルゼンスキーで後部座席にディープインパクト、助手席にスペシャルウィークだ。

「それじゃ、行くわね。シートベルトはOK?飛ばないように、しっかり捕まってね」

「えっ?飛ばす?」

その瞬間…ランボルギーニは急加速し、発進した。

「行くわよ!!モチのロンでノリノリで飛ばしていくわ!!」

その刹那、スペシャルウィークとディープリンパクトの悲鳴は爆音に書き消され…誰の耳にも入らなかった。

「流石に此処じゃ飛ばせないわね」

「飛ばさなくて良いよ!!」

羽田空港から無事に府中に到着したランボルギーニ。とは言え、この近辺はトレセン学園が近いこともあってか住宅地が多い。その為か、マルゼンスキーのランボルギーニは飛ばせず安全運転を行っている。

「お婆ちゃん。お父ちゃんもこの近辺で働いてるんだね」

「あら、サンちゃん（サンデーサイレンスのこと）から聞いてないの？あの子、トレセン学園の教師よ。今じゃ、有力なチームも率いていて、こちら辺じやチョベリグに有名人よ」

スペシャルウィークとディープリンパクト。マルゼンスキーお婆ちゃんから教えられ、父親の職業を初めて知る。

「ゴルシ、スカーレット、ウオツカ。この2人を部屋に連れてきてくれ」

「「アイアイサー!!」」

その頃、トレセン学園。

『チームスピカ。入部しない奴はダートに埋める』と書かれた写真付きの看板。その看板の写真には犬神家をオマージュしたのか、ダートに埋められた3人のウマ娘が写っていた。最早、怪しさ満点だが気にしてはいけない。

そんな看板を背景に、サンデーサイレンスは1枚の写真を3人の教え子に見せて指令を与えていた。サンデーサイレンスが見せた写真には仲良く写るスペシャルウィークとデイープリンパクトの姿が有ったのだ。

チームスピカ

チームスピカ。近い未来に於いてその名前を知らない競馬関係者は誰一人として居ない。知らぬはホースマンの恥と成る程の知名度を誇るチームと成るのだから。

異次元の逃亡者。黄金の不沈艦。緋色の女王。史上最強牝馬。日本総大将。英雄。黄金の暴君。その道を行く爆弾ウマ。祭りウマ。砕けない宝石。

そして、そのチームを導くのはアメリカの殿堂入り。かつて、修道女のような勝負服を纏い、偉大すぎる戦績を残した父親なのだから。今、その父親は次代のウマ娘達を導くためかシスター服ではなくスーツを纏い、子供達を指導する。

「スズカ。アイツら…ちゃんとやるよな？」

そんなチームスピカの部室。スーツ姿でパイプ椅子に腰掛けてはコーヒーを飲んでいるサンデーサイレンスは、部室に一人残つては競馬雑誌『別冊トウインクル』を読んでいる少女サイレンススズカに話し掛けた。

「多分…大丈夫ですよ。でも、先生も結構…親バカ何ですな」

「娘と息子は俺が一流に育てる。良くも悪くも、あの2人は俺に似てるからな」

トレセン学園にはスピカの他に有力なチームが複数有る。その中でも特に頭が抜け

ているのは2つのチームだろう。悔しいが、今のスピカの方ではその2つのチームを倒すことが出来ない。それに、サンデーサイレンスには分かっていたのだ…その2つのチームではスペシャルウィークとデーブインパクトはそこそこの程度の選手で止まる可能性があると。

「チームリギルとチームシリウスの教え方を否定する訳じゃない。むしろ、リギルのデータ論やシリウスのマニュアルに沿ったやり方の方が育つ選手も居る。

スペとデーブは俺とそっくりだ。だからマニュアルは一切通じない」

チームリギル。此の世でただ1人、22年前に無敗のクラシック制覇という偉大すぎる記録を残した伝説の名馬…皇帝シンボリルドルフを排出した超エリートチーム。今でも三冠馬ナリタブライアン、フジキセキ、エアグルーヴと言った精鋭達が所属している。

チームシリウス。名門トレーナー一族である桐生院の人がトレーナーとして率いるエリートチーム。嘗てはマルゼンスキーと激しいレースを繰り広げたテンポイントやトーショーボーイが活躍し、史上初の三冠馬セントライトが所属していた由緒正しきチーム。今は桐生院家の長女である桐生院葵がトレーナーとしてウマ娘を導いており、芦毛の怪物オグリキャップをチームリーダーとし、様々な適性を持つハッピーミーク、スペシャルウィークと同年でクラシックを共に戦う事になるセイウンスカイと言っ

た凄腕が所属している。

「先生のお子さんであるスペちゃんどデープ君って、先生そっくり何ですな」

「俺がひねくれず、最初から親に恵まれてたらスペのような感じに育っただろうな。内面はスペが一番似てて、外見はデープが一番似てる」

感情に浸りながらそう言ったサンデーサイレンス。すると、部室の扉が開いて麻袋を被らされて確保されたスペシャルウィークとデープインパクトを確保した3人組が帰ってきた。

「連れて「ゴルシ。正座」ふあ!？」

10分前。

マルゼンスキーと別れたスペシャルウィークとデープインパクトは時間に余裕があったので、トレセン学園を自由に歩いていた。

「僕達…今日から此処の生徒なんだね」

「うん…凄いね」

だが、2人の感動は一瞬でぶち壊れる。何故なら…

「フォーメーションΩ!!ウオツカ!!スカーレット!!目標に対し、ジェットストリームア

タツクを仕掛けるわよ!!」

「御意」

突如として草影から、マスクとサングラスで素顔を隠した怪しげな3人のウマ娘が出てきたのだ。3人ともスペシャルウィークとディープリンパクトよりも背が高く、中でも最も背が高い白髪のウマ娘はサンデーサイレンスよりも背が高い。

怪しげな3人は1人は長身な白髪のウマ娘。もう1人はボーイッシュな短髪のウマ娘。最後の1人は長いツインテールで巨乳のウマ娘だ。3人ともマスクとサングラスで素顔を隠しており、正体は分からない。

「わっわ!?なに!?!」

「何ですか!?!」

怪しげな3人は見事な連携でスペシャルウィークとディープリンパクトを包囲する。何処にも2人の逃げ場はない。完全に囲まれてしまった。

「ウオツカ!! スカーレット!! やっっておしまい!!」

白髪のウマ娘が指示を出し、ウオツカと呼ばれたボーイッシュなウマ娘、スカーレットと呼ばれた巨乳ツインテールのウマ娘は麻袋で2人を確保した。

「確保しました!」

「よーし!! 撤収よ!」

この3人は実はと言うとチームスピカのメンバーである。白髪の美女はゴールドシップ、ボーイッシュなウマ娘はウオツカ、ツインテールのウマ娘はダイワスカーレット。ウオツカとダイワスカーレットは最近入ったばかりだが、ゴールドシップはサイレンスズカと共に昨年度から在籍しているのだ。

ではその3人はどうしてるのか？

「ウオツカ、スカーレット。誘拐を考案したのは？」

「ゴールドシップです」

「いや、連れてこいって言ったのトレーナーじゃん!!」

軽くサンデーサイレンスから少し怒られていた。当然だ、確かにサンデーサイレンスは連れてきてくれとは頼んだ。しかし誘拐紛いな方法を使えとは言っていない。

「ブラジルのドツキリじゃないぞ。誘拐射殺が日常なアメリカじゃ、マジで洒落にならない」

「ここ、日本。アメリカじゃない。OK? 爺さん」

「誰が爺さんだ」

そんなサンデーサイレンスのお説教を見ながら、スペシャルウィークとデーブインパクトは苦笑いを浮かべる。2人の手にはサイレンスズカが淹れてくれたお茶が入った紙コップが握られていた。

「ごほん。まあ、2人も怪我は無かったから、これでお仕舞い。それじゃ…整列!!」

しかし、姉弟に怪我は無かった。その為か説教はこれで終わり、サンデーサイレンスの一言でチームスピカの4人は横1列に並んで姉弟の前に立つ。

「!!「ようこそ!!スピカへ!!」!!」

「とっ言う訳でお前達は俺が導く。驚いたか?お父ちゃん…トレセン学園の先生だったんだよ」

サイレンススズカ、ゴールドシップ、ウオツカ、ダイワスカーレットがペコリと一礼しサンデーサイレンスが言葉を繋ぐ。しかし…

「あつ…お父ちゃん。実は…」

「お婆ちゃんからお父ちゃんがトレセン学園の先生って聞いてちゃった」

「マルゼンさーん!?!」

サンデーサイレンス。マルゼンスキーお婆ちゃんの手で数年間、暖めていたドツキリが潰れてしまい、悔しそうな声を出してしまった。

スペシャルウィーク、エルコンドルパサー、グラスワンダー、セイウンスカイ、キン

グ
ヘイロー。彼女達が切磋琢磨する新しい時代が今、幕を上げた。

楽しいC組の仲間達

翌朝。ゴールドシップ主導の元で拉致されたスペシャルウィークとデーブインパクトの姉弟は無事に、サンデーサイレンス率いるチームスピカに入部し学生寮にも入ることが出来た。

そして今は学生寮で初めての目覚めであり、今日から楽しいトレセン学園での学校生活が始まるのだ。

「むにやむにや…食べられないよ」

デーブインパクトは年頃の中学生。同世代の女子生徒と同じ部屋にしてしまうとナニかの間違いが起きてしまう可能性も高い。その為か、間違いが起きないようにデーブインパクトとその姉であるスペシャルウィークは同じ部屋に纏められた。

「お姉ちゃん。もう朝6時だよ」

そして現在、姉であるスペシャルウィークは大絶賛：弟であるデーブインパクトの手で起こされていた。今の時刻は6時。すでに多くの寮生活を送るウマ娘達は起きて、寮の食堂で朝食を食べている頃だろう。ウマ娘とさえいって、彼女達は現役バリバリのアスリート。朝食を食べなければ勉強とトレーニングは出来ない。

「お父ちゃん…あと2時間…」

「あれならお姉ちゃんの分の朝食、僕達で食べちゃうよ?」

まだ寝惚けて寝言を言うスペシャルウィーク。そんなスペシャルウィークに対し、ディープリンパクトは起こす際の奥の手を使った。それは「お姉ちゃんのご飯食べちゃうよ?」等と言った囁きである。

昔からスペシャルウィークは大食い。ディープリンパクトの倍ほど食べる。父親のサンデーサイレンスもそこそこ食べるが、スペシャルウィークは女の子なのに父親と同程度に食べる。そんな食べることが大好きなスペシャルウィークに対し、ご飯食べちゃうよ?は正に必殺の言葉と成るのだ。

「ディープリンちゃん!!お父ちゃん!!それ、私のご飯!!」

食べるのが大好きなスペシャルウィーク。そんな言葉を聞いてしまえば、起きるしかないだろう。布団を突き飛ばす勢いで起きたスペシャルウィーク。そんな彼女はニコッと人懐っこい笑みを浮かべた弟と目があつた。

「おはよう!ご飯は食べてないから、安心してね?お姉ちゃん」

「もう、ビックリさせないでよ」

スペシャルウィーク、無事に起床。それと同時に、部屋の扉がドンドンと少し強めに叩かれた。何事かと思つたスペシャルウィークとディープリンパクトであつたが、此処

は姉であるスペシヤルウィークが動き出して扉を開けた。

「はい……どちら様でしょうか？」

扉を開けたスペシヤルウィーク。扉の先にはショートヘアーの上級生が立っていた。学年は恐らくだが、スペシヤルウィークよりも3つほど上だろうか。

「やあ！君がスペシヤルウィークだね？サンデー先生から話は聞いてるよ。私はフジキセキ、高等部3年生で中等部の頃はサンデー先生から色々とお世話に成ったんだ」

その上級生はフジキセキ。高等部では最上級学年であり、中等部の頃はサンデーサイレンスが担任として面倒を見ていたそうだ。チームとしては最強チーム、リギルに所属してるが色々サンデーサイレンスとは未だ接点があるようだ。

「どうだい？無事に起きたかな？ポニーちゃん。私はサンデー先生から君達の寮生活の事を頼まれたからね。」

サンデー先生と初めて会った時もそうだけど、なんだか他人の気がしなくてね。私の事はお姉ちゃんのように頼っても良いよ」

※フジキセキは史実に於いて、日本のサンデー一族の初年度の子供です。つまり史実ではスペシヤルウィークとディープのお兄さん。

「あっはい!!弟共々宜しくお願ひします!!」

「それじゃあ……私は行くよ。何か有ったら頼りたまえ。またね」

フジキセキはそう言つてスペシャルウィークの前から去つていく。

だが…その時、スペシャルウィークは知らなかつた。

フジキセキが訳有つて実質的にリギルを自主退部していた事を。その訳をスペシャルウィークは知らず、フジキセキから夢を託される事を。

午前8時20分。

「お姉ちゃんはC組だっけ？」

「うん。ディープちゃんはB組だもんね」

遂に初登校。今日、いよいよクラスメートの仲間達が分かるのだ。しかし、年齢が違ふためかスペシャルウィークはC組でありディープリンパクトはB組。勘違いされやすいが、このB組やC組は学年も示しており、世間的にはB組は中学2年生でC組は中学3年生だ。

「それじゃあ、昼休みね。お姉ちゃん！」

「うん！」

デーパーインパクトはB組の教室に入っけいき、スペシャルウィークも大きく息を吸い込む。彼女の目の前にはC組の扉があり、彼女は緊張しながら扉を開けた。

「はっ初めまして!!おはようございませす!!」

扉を開け、一歩踏み出したスペシャルウィーク。彼女は入るなり、大きな声を出して教室に入った。挨拶は大事だ、社会人の最低限マナーである。

すると、クラスのウマ娘達は全員がスペシャルウィークを見る。そりやそうだ。彼女達は先日から転校生が来ることを知らされていたが、その転校生がいきなり大きな声を出せば注目するのも当然だろう。

(早速やつちやつた…)

と思うスペシャルウィークだったが、そんな彼女に近づく女の子が一人。その女の子は小柄でピンクの髪をしたウマ娘だ。

「ねえ?なんて言うの?」

「あつ…:スペシャルウィークです」

「スペシャルウィーク?だったらスペちゃんだね!!私、ハルウララ宜しく!!」

そのピンクの少女はハルウララ。彼女はスペシャルウィークにスペちゃんとアダ名を早速着けると、優しく手を握った。

すると、今度はプロレスマスクを着けた少女、茶髪の大和撫子な少女、のほほんとし

た若草色の髪をした少女、正にお嬢様のような少女が集まってきた。

「スペちゃん！紹介するね。この子はエルコンドルパサーのエルちゃん！」

「エルコンドルパサーです!!宜しくてーす!!」

プロレスマスクの少女はエルコンドルパサー。

「此方はグラスちゃん！」

「グラスワンダー。宜しくお願いします」

大和撫子な少女はグラスワンダー。

「此方はセイちゃん」

「セイウンスカイだよー宜しく」

若草色の少女はセイウンスカイ。

「最後にキングちゃん！」

「キングハイローよ！宜しくつてよ」

最後にキングハイロー。

後に黄金世代と呼ばれる事になるメンバーが集まった瞬間だ。

「あつ!!ウララ、B組の転校生に挨拶行かなきゃ!!」

因みにハルウララはC組ではなくB組である。ハルウララはB組の転校生である
ディープリンパクトに会うために、B組に帰っていった。

先生、走りたいです

スペシャルウィークとデーパーインパクトが入学する1週間前。

トレセン学園には多くのトレーニング設備が沢山有る。本番さながらの練習が出来る芝生のレース場、同じく本番さながらの感覚でダートを走れるダート場、ウッドチップが沢山敷き詰められたトレーニングコース。走るための設備だけでこの有り様であり、屋内に有る物も含めれば沢山のトレーニング設備が充実してるのだ。

一年中適温で利用する事が出来る屋内プール。ルームランナー等の最新のトレーニング機材が揃ったトレーニングルーム。このお陰か、トレセン学園では今日も多くの学生が様々な設備を利用してトレーニングを行っている。レースで勝つため、純粋に強く速く成るために、苦手を克服するために、自己ベストを更新するために。理由は様々だ。時刻は午後7時。門限まで残り1時間を切った頃だろうか、未だ帰らず1人の少女が黙々と負荷の軽い重りをレッグリフトのマシーンで上げてはリハビリを行っていた。

「はあはあ……絶対に……レースに復帰するんだ」

そのリハビリを行っていたのはフジキセキ。スペシャルウィークやデーパーインパクトを気に掛けている寮の先輩であり、来年度からは大学部に進学するかトレセン学園

を卒業するのか進路の選択を迫られている最高学年だ。

フジキセキは優秀な選手だ。いや、だったと言えるだろう。入学早々、最強のチームであるリギルに所属したフジキセキは瞬く間に一流選手の階段を上った。G1でも当たり前のように勝利し、誰もがフジキセキのクラシック制覇を疑わなかった。しかし、フジキセキに突如の悲劇が起こったのだ。

フジキセキは脚に大怪我を負い、クラシックでの疾走はかなわなかった。僅か4度のレースしか走れず、されど無敗。多くの医者から2度と走れない、レースには先ず復帰できない。そんな絶望的な言葉を投げ掛けられた。フジキセキの負った怪我は生半かな物ではなく、どの医者から見ても復帰は先ず不可能な物だった。

だけど…

『良いか？此の世には諦めなければ夢は叶う、不可能さえも可能になる。まあ、かめはめ波撃ちたいとかは叶わないけどな。』

何故、俺がそう自信を持つて言えるのか？それは俺がその不可能を可能にした証明だからだ。あつ、男のウマ娘つて事じゃ無いぞ。俺はガキの頃、病気で医者さえも投げ捨てた程の事態に見舞われた。だけど、俺と俺の養母は不可能を可能にした』

中等部の3年間、担任だった恩師の体験と言葉、そしてもう一度走りたいという欲望がフジキセキを動かす。

「フジキセキ。もう直ぐ寮の門限よ」

その時、トレーニンブルームの扉が開いて眼鏡をかけた若い女性が入ってきた。その女性は東条ハナ。最強チームリギルの若きトレーナーであり、データ論を用いて生徒を導く凄腕のトレーナーである。

「フジキセキ…」

しかし、東条もリハビリを懸命に頑張るフジキセキにかける言葉が見付からない。フジキセキが負った怪我の事は東条も理解しており、復帰は先ず無理だと思っている。勿論、出来るならばフジキセキに再びレースに出て快くまで走って欲しい。それが本心だ。

だから東条はデータや人脈を駆使してはフジキセキ復活の手助けをしようとした。しかし、過去のデータから見てもフジキセキの負った怪我と同じ怪我をして復活した選手は皆無であり、多くの医者が諦めた。

「あと…10分だけでも」

門限までもうすぐ。それが過ぎれば今度は消灯時間がやって来る。その時だった。

「走りたいか？フジキセキ」

ふと、男の声が聞こえてきた。このトレセン学園で成人男性は限られており、この声は間違いなくサンデーサイレンスの物である。しかし、フジキセキと東条も周囲を見回

すがサンデーサイレンスの姿はない。

「(ト)、(ト)にサンデーさんは居るぜ」

もう一度、サンデーサイレンスの声が聞こえる。その声の方を見ると不自然にニンジンのダンボール箱が置かれていたのだ。

「いや…まさか」

ダンボール箱に良い歳したおっさんが隠れる訳がない。フジキセキと東条も同じことを思ったが、このサンデーサイレンス…まだアメリカなノリが残っていたのか、こう言うのをやっちゃやう男である。

「待たせたな!!」

「マジか!?!」

ダンボール箱を脱ぎ捨て、中からサンデーサイレンスが出てきたのだ。なんという事でしょう。サンデーサイレンスはダンボール箱に身を隠しては潜んでいたのだ。

「先生なにやってるの!?!」

「ダンボールは偉大な英雄の嗜みさ」

「いや…それスネークよ。コジマプロダクションに訴えられるわよ」

蛇の名前をしたおじさん宜しく出てきたサンデーサイレンス。彼はダンボールをすみに置くと、フジキセキを見る。

「でっ？フジキセキ…走りたいか？」

「走りたいよ…走りたいよ先生!!もう1度、思いっきりターフを駆け抜けたいに決まってるじゃないか」

「走ることを自分から辞めたいウマ娘は居ない筈だ。フジキセキも出来るならば走りたい。」

「サンデーさん。フジキセキを走らせたいのは私も同じ…でも無理よ…」

東条も悲痛な表情をする。様々なデータ、医者、過去の医療を全て見てもフジキセキが復帰するのは不可能だった。だが…この男は違う。

「俺は違うな…」

「でも」

「俺がその存在証明だからだ」

※サンデーサイレンスは下痢で死にかけた際に、普通のメンタルをした馬なら間違いなく死んでると言われました。あとサンデーサイレンスは小柄で、当時の関係者からサンデーサイレンスと同じ体格の馬は本来なら競走馬にも成れないと言っていました。そして種馬時代も強靱な精神力と体力で蹄葉炎の発症を3ヶ月遅らせた。

「フジキセキ。お前が決める。俺達は手伝える事は手伝えるが、最後に奇跡を起こすのはお前だ」

そしてフジキセキが選んだ答えは……

時は現代。スペシャルウィークとデーパーインパクトも初日の授業を終えて、部室にやって来た。

「おはようございませーす!!」

「あつ、スペちゃんとデーパー君おはよう」

先ず部室に居たのはサイレンススズカであり、スペシャルウィークとデーパーインパクトは2番目と3番目であつた。

「スズカさん早いですね!」

「早く走りたくて」

すると、再び扉が開いて……

「グッドイブニング」

やけにネイティブな発音でこんにちわを言ったゴールドシップがやって来た。そしてゴールドシップに続くように……

「こんにちわ!!」

ダイワスカーレットとウオツカもやって来た。

そして……

「おっ!俺達が最後か」

トレーナーであるサンデーサイレンスがやって来た。しかし、サンデーサイレンスの後ろにはフジキセキが居たのである。

「フジキセキ先輩!」

「なんで?! お前、リギルだっただろ!」

フジキセキがリギルである事を知っているサイレンススズカとゴールドシップは驚く。だが…ニコツとフジキセキは笑みを浮かべた。

「あつ! 言つてなかったね。私は今日からスピカ預かりに成ったんだ。宜しく」

「「えっええええー!?!」」

フジキセキ。奇跡を起こして復活する為にスピカ預かりとなる。色々と聞きたいスペシャルウィーク達であったが、ごほんとサンデーサイレンスカ咳払いを行った。

「話は今日の練習が終つてからな。そうそう、今月からゴルシとスズカ以外もトウインクルシリーズに参戦するぞ。」

そうだな…2週間後にスペとディーブがデビュー戦、それに続くようにスカーレットとウオツカもデビューだな」

「えっ? 2週間後?」

「おう。俺が考案したトレーニングをティナ(今の奥さん)の監修の元で行ってきたスペとディーブなら問題はない。もう、申し込んだから宜しく!!」

スペシャルウィークとティープインパクト…デビュー戦が決まる。

迫るデビュー

スペシャルウィークとディープインパクトのデビューに備えた2週間。この2週間、姉弟は厳しいトレーニングよりも大変だった課題が1つ存在している。というか、厳しいトレーニングに関してはいさほど問題ではなかった。スペシャルウィークとディープインパクトは幼い頃からサンデーサイレンスが考案した、適切な練習メニューをこなしてしており基礎は出来ている。トレーニング施設が周囲にはないとは言え、流石は殿堂入りを果たしたサンデーサイレンス。北海道の立地を利用したトレーニングを考案し、今の妻の手伝いがあるとは言え2人の子供は立派に成った。

では今の姉弟に取っての大きな課題とは何なのか？それは…それは…

「はい…そこでワンツーステップ!!そしてポーズ!!」

ダンスと歌のレッスンである。サンデーサイレンスが現役だった頃のアメ리카にはそんな文化は無かったが、日本の競馬は違う。日本の競馬はトウインクルシリーズと呼ばれており、レースが終ると出場したウマ娘達は応援してくれた観客への感謝を超えてウイニングライブを披露するのだ。言わば、アスリートとアイドルを合わせた存在なのである。

レースに勝つのは勿論のこと、ウイニングライブもすっかり決めてこそ日本の競馬では勝利は完璧な物に成るのだ。故に、スペシャルウィークとデーブインパクトはフジキセキ指導の元でダンスのレッスンを行っているのだ。

「どうですか!？」

「最初よりはマシに成ったね。サンデー先生もライブがバリバリ教えたら良かったんだけどね……」

毎日ライブのレッスンを行った為か、日に日にスペシャルウィークとデーブインパクトのライブの腕前は上がっている。これならウイニングライブに出ても問題はないだろう。

「えっ? お父ちゃん、ライブ出来ないんですか?」

フジキセキからサンデーサイレンスがライブを教える事が出来ないと言われ、驚くスペシャルウィーク。

「授業程度なら教える事が出来るよ。先生は日本で教員免許を取ったからね。でも、先生が現役だった頃のアメリカにはウイニングライブは無かったそうなんだ」

『ウイニングライブ? なにそれ、美味しいの?』

10年以上前、東京の大学で後輩のシンボルドルフ相手にそう言ったサンデーサイレンスであった。

サンデーサイレンスが現役だった頃のアメリカには日本のトウインクルシリーズと異なり、ウイニングライブは存在してなかった。確かにファン感謝祭やケンタッキーダービー等の大きな試合の開会式ではライブが行われているのだが、アメリカのアメフトリーグのようにプロのミュージシャン達がライブを行う為にウマ娘達はライブを行う必要が無かったのである。

「アメリカには無かったんだ」

「うん。因みに、タイキシャトルから貰った現役時代の先生がこれね」

フジキセキは一枚の写真を取り出して姉弟に見せる。

その写真はリギル所属の最強マイラー、タイキシャトルがフジキセキに渡した貴重な写真だ。勿論、その写真はコピーされた物だがあんまり出回っておらず、現役時代のサンデーサイレンスが写っていた。しかし…

「うわ…」

「昔のお父ちゃん…ガラ悪そう」

写真に写る若きサンデーサイレンスはそれはそれは、ヤンチャだった。デイープインパクトに瓜二つな少女と見間違える程の容姿であり、レース後なのかシスター服を模した勝負服を身に纏い、腰には何故かコルトガバメントが携行されていた。

目付きは此の世を怨んでますよつと言いたげに鋭く、カメラに向けて中指を立ててい

た。サンデーサイレンス、幼少期の体験故か物凄くヤンチャだった模様。

「だけどね。此方はグラスのお父さんが撮った写真だけど」

フジキセキは2枚目の写真を取り出した。その写真は影から撮られたのか、若きサンデーサイレンスはカメラに気付いておらず、ファンと思われる幼子の頭を優しく撫でる若きサンデーサイレンスの姿であった。

「へっぷし!!」

一方、サンデーサイレンスはフジキセキの手で現役時代の事が軽く暴露されている事を知らず職員室で仕事を行っていた。とは言え、誰かが噂をすれどくしゃみが出てしまふのか、くしゃみをしてしまふ。

「誰だ?噂してるの…」

されどサンデーサイレンスは仕事を続ける。スペシャルウィークとデイープインパクトのデビュー戦が近付き、その次はダイワスカーレットとウオッカのデビュー戦だ。それにゴールドシップは6月には2連覇が掛かった宝塚記念が近々に迫る。教え子達を支えて導くトレーナーとして、今は忙しいのだ。

(それに今年はスぺのクラシック、来年はデイープのクラシックが有るからな)

何より今年1年はスペシャルウィークにとって特別な1年と成るだろう。何故ならスペシャルウィークは今年からG1に挑戦する事が出来る上に、一生に1度しか挑戦できない三大クラシックが迫っている。

全てのウマ娘が中学三年生の時しか挑戦できない特別なレース、三大クラシックである皐月賞、日本ダービー、菊花賞。この3つは特別なレースであり、中でも日本ダービーはその中でも特別なレースなのだ。

「娘さんもクラシックに挑戦するんですよね」

そんな若い女性の声が聞こえ、サンデーサイレンスは2つ隣のデスクを見る。そこには使い古された『トレーナー白書』と題された書物を見る新卒と思われる若い女性が居たのだ。

彼女は桐生院葵。名門トレーナー一族、桐生院家の長女であり高等部3年生である葦毛の怪物オグリキャップを育て上げた父親からチームシリウスのトレーナーを受け継いだ若き天才だ。彼女は父親譲りのマニュアルを用いた教育を得意とし、高等部1年生で様々な距離適性を持つウマ娘ハッピーミークやジュニアC組のセイウンスカイを新たに導くトレーナーである。

「葵ちゃんこのセイウンスカイも出るよな?」

「勿論ですよ。今年こそ…三冠馬、行けそうなんです!」

自信ありげにそう言った桐生院。三大クラシックを全て制したウマ娘は三冠馬の称号を得る。しかし、その三冠馬の称号を持つているウマ娘はたった5人だけ。

セントライト、シンザン、ミスターシービー、シンボリドルフ、ナリタブライアン。その中でも無敗でクラシックを制したのはシンボリドルフただ1人。長い日本競馬の歴史の中でもたった5人しか誕生していない三冠馬。如何にこの三冠馬に成ることが難しいのかが分かるだろう。

「葵、サンデーさん。違うわよ…今年のダービーは貰ったわ」

新たな声が聞こえる。それはサンデーの向い側からだった。

「そっその声は東条先輩?!」

最強チーム、リギルを導く東条ハナである。東条は2年前、ナリタブライアンを三冠馬に導いた実績がある。

「おハナさん。グラスワンダーとエルコンドルパサー、どっち? 2人とも?」

リギルの中でC組に所属しているのはグラスワンダー、エルコンドルパサーの2人。

「一先ずエルね。グラスはりハビリが未だ必要だわ」

グラスワンダーは怪我の影響で未だりハビリが必要だ。しかしフジキセキが負った怪我と比べればマシな物であり、時間がかかるが間違いなくレースに復活できる。東条としてはグラスワンダーにも三大クラシックに出て貰いたかったが、今後の為にも療養

すべきだと判断したのだ。

なので、リギルから三大クラシックに参戦するのは帰国子女の一人であるエルコンドルパサーである。

東条は日本ダービーは貰ったと言ったが三冠とは言っていない。という事はエルコンドルパサーはダービーには出るが、皐月賞と菊花賞には出ないと言うことだ。

※当時、外国産馬は三大クラシック出ることが出来ず、地方から中央に移ってきた馬もクラシックには出れませんでした。オグリキャップはその為に三大クラシックには出ることが叶わず、もし出れたら三冠確実だと言われています。

その為か今では追加登録料を払えばクラシックに走ることが可能と成っており、そのお陰でテイテムオペラオーは三大クラシックに出ることが叶いました。

「いえ、違いますよ。今年の三冠馬はリギルでもシリウスでもスピカでも有りません。私達、カノープスのキングヘイローさんが貰います」

新たな声が聞こえる。サンデーサイレンス、東条、桐生院がその声の方を見るとスーツ姿の若い男が立っていた。

「南坂!?!」

その若い男の名前は南坂。まだまだ駆け出しのチームであるカノープスを引っ張る若きトレーナーだ。

カノープスはスピカよりも規模が小さく、メンバーはまだまだ少ない。高等部3年生のナイスネイチヤ、そしてスペシャルウィークと同学年でありクラシックに挑戦するキングハイロー、デーブインパクトと同学年で有力視されるアドマイヤジャパンが所属している。

「キングさんは三冠馬を目指して、頑張っています。私は…彼女を三冠馬にしたいんです!!」

スペシャルウィークの同期であるキングハイロー。彼女は唯のウマ娘ではない。母はアメリカでG1を7度も勝った凄腕であり今は超有名デザイナー、父親は陸上十種競技の頂点に立ったキングオブアスリート。血統は正に選ばれた存在なのだ。

※史実でもキングハイローの両親は凄かった。母はアメリカのG1を7回制覇したグツバイハイロー。父は最高峰のレース、凱旋門賞を制覇した欧州最強馬。

「いや…違うな…」

「ええ、そうです」

「何故なら…」

南坂の言葉に反論するように、サンデーサイレンス、桐生院、東条が立ち上がる。

「うちの子が勝つからだ!!」

しかし、その前に……

「いや、デビューが先じゃね？」

職員室に課題を持ってきたゴールドシップに突っ込まれる大人4人であった。そして…スペシャルウィークとデイリーインパクトのデビュー戦が始まる。

幕間 勝負服を頼むお父ちゃん

スペシャルウィークとデイベインパクトの記念すべきデビュー戦。今日は待ちに待ったその日であり、数年間続けてきたサンデーサイレンス考案のトレーニングとトレセン学園に来てから受けたトレーニングの成果を試す瞬間である。

「さてと…記念すべきデビュー戦だな。だけど、お父ちゃんはお前達の真の晴れ舞台の為に、ちよつとやらなくちやいけないんだよな」

府中の住宅街に立つサンデーサイレンス。スマホを取り出して確認すると、午前11時。可愛い長女と自分そっくりな長男のデビュー戦までは時間の猶予がある。それに、2人のデビュー戦が行われるのは府中にある競馬場であり、走れば直ぐに着く事が出来る。では、サンデーサイレンスはどうして此処にやって来たのか？それはサンデーサイレンスの目の前にある建物に訳がある。

サンデーサイレンスの目の前には大きなデザイン事務所があり、その事務所の入口には『グッバイヒーローデザイン事務所』と書かれていた。

グッバイヒーロー。競馬…特にアメリカの競馬に関わる人達の中ではその名前は知れ渡っている。グッバイヒーローは現役時代、アメリカの競馬で最高峰のレースである

G1を7度勝利した超有名選手だ。サンデーサイレンスの1つ上の世代であり、サンデーサイレンスがアメリカのジュニアハイスクールに入学した頃からスター選手だった。

サンデーサイレンスがこのグツバイヒーローの事務所にやって来たのには訳がある。それはスペシャルウィークは勿論のこと、ディープリンパクト、ダイワスカーレット、ウオッカの勝負服を作って貰う為だ。勿論、サンデーサイレンスの自腹＋経費からである。

(ふっふっふ…目に浮かぶぜ。アイツ等の笑顔が!!)

サンデーサイレンスは思い出す。高額だろうがなんのその、サイレンススズカとゴールドシッパの勝負服をグツバイヒーローに注文して、完成品の勝負服を2人に手渡した事を。

『ありがとうございます!!サンデー先生!!』

『おおおお!!流石だぜ!!爺さん!!アタシに似合う、バリバリの衣装じゃんかよ!!』

勝負服はG1等の大きなレースの時に着る、自分の正装とも言えるのだ。サンデーサイレンスが現役の頃に活躍していたアメリカでもそれは同じであり、ここぞつと言うレースの際に勝負服を纏って走るのは世界共通なのだ。

絶対に、間違いなく、スペシャルウィークもディープリンパクトも、ダイワスカーレッ

ともウオツカも喜んでくれること間違いなしである。

既にアポは取っており、サンデーサイレンスはグツバイヒーローの事務所へと入っていった。

「この私がデザインするんですもん。勿論、素晴らしい物に成るわよ」

キングハイローそっくりな美女がそこには居た。彼女はキングハイローの母親であり、アメリカカのGーウマ娘であるグツバイハイローである。今は現役を引退しており、デザイナーとして大きな成功を納めては日本を拠点にして活躍しているのだ。彼女がこれまでデザインした勝負服は数知れず、中でもナリタブライアン、エアグルーヴ、テイムオペラオーと言った最強チームリギルのウマ娘達が代表作と言えるだろう。

「そりゃ、俺の娘は勿論、教え子は皆可愛いからな。おっと！ディープは数年後はイケメンだな」

「何度でも言いなさい。所で、私の娘は既にデビューを終えて3連勝！来月の弥生賞は貰ったも同然だわ」

グツバイハイローは我が子を自慢するようにそう言った。キングハイローは既にデビューしており、破竹の3連勝。しかも無敗だ。この調子で行けば、無敗の三冠馬も行けるかも知れないのだ。

「弥生賞ね…皐月賞の前哨戦には丁度良いな。弥生賞は皐月賞と条件は同じだ。弥生賞を勝てば、確かに自信は着くだろう」

「ええ。あと、これが娘さんと息子さんの勝負服のデザインよ。娘さんの納品は皐月には余裕で間に合うわ。息子さんののは今年の12月頭ね…今じゃ、中2でも出れるG1が12月に有るわよ」

「ホープフルステークスね。あれは賛成だ、ディープのG1デビューに丁度良い。そこで…デザインは…おっ！あの2人にピツタリだ!!」

グツバイハイローが見せてくれた姉弟の勝負服のデザイン。それを見て、サンデーサイレンスは笑みを浮かべる。彼の表情から分かる通り、スペシャルウィークとディープインパクトの勝負服は2人にピツタリなデザインのようなのだ。

「じゃあ、俺は行くわ。またな、ハイロー先輩」

「その名前では呼ばないで。ハイローだと、父親とおなじなのよ」

サンデーサイレンスが去って暫く。グツバイハイローはテレビを着ける。テレビを着けると、トゥインクルシリーズのデビュー戦のテレビ中継が映し出されていた。

「ごめんなさい。弟…サンデーサイレンス。今さら…お姉ちゃんと呼んでなんて、言えないわ」

サンデーサイレンスは知らない事だが、グッバイヒーローとサンデーサイレンスは姉弟である。訳有って、母親はサンデーサイレンスを守るためにわざと、赤ん坊のサンデーサイレンスを施設に預けたのだ。

※マジです。史実でも姉弟です。つまり、キングヒーローはサイレンススズカ、ディープリンパクト、スペシャルウィーク、フジキセキと従兄弟です。ですがグッバイヒーローとサンデーサイレンスの父親であるヒーローは恐ろしい程に狂暴な暴れん坊だったとか。

「今は…可愛い姪と甥のデビューを見守りましょう。私より凄い弟の子ですもん。勝つに決まっていますわ」

写真でしか見たことがない甥と姪にエールを送り、グッバイヒーローは亡き父を思い出す。

「ああ、ストロー夫妻に感謝ですわね」

そして…グッバイヒーローが実の姉だとサンデーサイレンスが知るのは来年の夏休み。まさかの人物から教えてもらおう事に成るのだった。

メイクデビュー

「なあ、フジキセキ。スベとディープの奴…大丈夫だよな？」

「ライブは教えたよ。後はあの子達次第だね」

一番最前列の観客スタンド。そこにはチームスピカの面々がスペシャルウィークとディープインパクトのデビューを見守るために、その時を待っていた。

GIレースに出ることは今後、多々あるかも知れない。しかしデビューは生涯に1度しか無いのだ。そんなある意味では、凱旋門賞よりも有馬記念よりも、日本ダービーよりも大事なかも知れないデビュー戦。間違いなく、デビュー戦は全てのウマ娘達が心に刻む大切な思いでと成るだろう。勝っても負けてもこの瞬間から競技者としての日々が本格的に始まるのだから。

スペシャルウィークとディープインパクトは別のレースだが、2人とも種目は芝の2000m。所謂、中距離と呼ばれるレースだ。

「スベ先輩、ディープ先輩…」

「頼むぜ…」

心配するかの如く、1年生であるダイワスカーレットとウオツカは祈るように2人の

勝利を願う。もう既に、スペシャルウィークはスターティングゲートに入っており、何時レースが始まってても可笑しくない。

「心配しすぎ。始まるぞ」

サンデーサイレンスがそう言った瞬間、スターティングゲートが開いてスペシャルウィークのデビュー戦が始まった。出遅れることなく、全員が無事にスタートした。だが、スペシャルウィークは中盤集団に居ており：白髪で眼帯を着けたウマ娘が一気に先頭を突き進む。

「スズカや俺のように逃げか。あの子は確か、チームベガのクイーンベレーだったな」

先頭を行くのはクイーンベレー。チームベガ所属のウマ娘であり、今回の一番人気だ。確かに逃げは一番分かりやすい戦法だ、最初から逃げて逃げて逃げ切れれば良いのだから。だが、逃げはスタミナの消耗も激しく、ゴール手前で失速する可能性も高い。

『先頭を進むのはクイーンベレー!!やはり、一番人気は伊達じゃない!!』

実況の声が響く。だが、ニヤリとサンデーサイレンスは笑みを浮かべた。

「さあ、スペが動くぞ」

サンデーサイレンスの言う通り、どんどんスペシャルウィークが順位を上げていく。これには観客席がどよめいた。第4コーナーを曲がる頃には、スペシャルウィークはクイーンベレーを標的に捉える。

「なっ!？」

咄嗟に後ろを向いて驚くクイーンベレー。だが、彼女はラフプレー上等なのか、地面を蹴つては土をスペシャルウィークの顔面に飛ばす。しかし、スペシャルウィークは見切っているのか…その土を簡単に避けていく。

「あの…サンデー先生?」

「アメリカじゃ、ラフプレーが多くてな。一応、水風船を使って対処法を教えて良かったよ」

「…アンタ、何教えてるの!？」

サンデーサイレンスは思い出す。アメリカは特に希少が荒く、ラフプレーをやる選手が多かった。と言うか、サンデーサイレンスもラフプレーをやったことが有る（イージーゴアに噛みつこうとしました）。

そんな経験も有ってか、サンデーサイレンスは水風船を使っては遊びながらスペシャルウィークとディーパックトにラフプレーの対処を遊びながら教えていたのだ。

『並ぶ並ぶ!!スペシャルウィークがクイーンベレーに並んだ!!』

スペシャルウィークは今回、差しで行っている。だからスタミナの消耗も逃げと比べれば多少は温存できる。抑えていた力を出し、スペシャルウィークは物凄い末脚を用いてクイーンベレーに並ぶ。

「いけえええ!!」

「頑張れスペちゃん!!」

ゴールドシップとサイレンススズカが声を出す。

そしてスペシャルウィークは驚異的な、父親譲りの末脚でクイーンベレーを抜き去った。

『スペシャルウィーク!!抜けた!!抜け出した!!』

もう、クイーンベレーには再加速する力は残されていない。逃げは最初から飛ばして逃げきる戦法だ。後の事は殆ど考えていない。

『スペシャルウィーク!!脚色は衰えない!!そして、今…ゴール!!』

スペシャルウィーク。見事な一着でデビュー戦を白星スタートさせる事に成功した。

「いよっし!!」

娘は勝った。次は息子の番だ。

そして…後世まで永久的に語り継がれる英雄の衝撃は此処から始まった。

『コンゴウリキシオー逃げる!!逃げる!!このレースの主役はやはり、彼女なのか!』

始まったデビューパクトのデビュー戦。大きなリードを保ち、先頭を逃げるのは

コンゴウリキシオー。チームアルタイルという所に所属するウマ娘であり、実はディープリンパクトと同年の少女だ。

「行ける!!」

だが、1つ。コンゴウリキシオー達に残念だったのは、同学年に彼が居たことだろう。コンゴウリキシオーが第4コーナーを先頭で曲がりきった時だった。誰もがコンゴウリキシオーの勝利を確信しただろう。チームスピカの面々以外は。

『おーと!?!後続の1人が仕掛けた!?!なっなんなんだ!?!これは物凄い末脚で加速した!!』
実況も驚く程の末脚。何が起きたのか分からないコンゴウリキシオーだったが、それは直ぐに理解できた。瞬く間に自分は先頭では無くなり、自分は2番手に成ったと。

『ディープリンパクト!!先頭に抜け出した!!恐ろしい末脚!!』

そう、ディープリンパクトである。ディープリンパクトはスタートがどうも苦手だった。だから彼はゴールドシップやサンデーサイレンスが得意とした、追い込みを使うことにしたのだ。追い込みは逃げの真逆であり、後方からレースを進める。レース中盤から終盤まで力を貯めて貯めて一気に解放して全てを瞬く間に抜き去る戦法だ。

「なっなに!?!あの走り方!?!」

『飛んでる!?!間違いなく翔んでいる!!とんでもない新星が現れた!!』

ディープリンパクトは小柄だ。現役時代のサンデーサイレンスと同じく、女の子と間

違えられる程の小柄だ。しかし、彼はその身長差を覆す大きな武器を3つ産まれて持っている。1つは驚異的な柔軟性、2つが天性の強靱なバネ。この2つを使うことで高スピードと体格以上のストライドを誇り、翔ぶように走ることが出来るのだ。

衝撃が爆発したように力を解放したディープリンパクトは止まらない。そして、着差以上の圧倒的な強さを対戦相手は勿論のこと観客に見せ付けて優勝した。

そして…最後の3つは…

「なっ…なんで!？」

2着とは言えゴールしたコンゴウリキシオー。彼女に続くように他のウマ娘達も何とかゴールした。しかし、彼女達はそこでディープリンパクトの規格外を知ってしまった。

「なんで…呼吸が乱れてないの!？」

3つ。ディープリンパクトの肺活量はウマ娘の領域を越えていたのだ。

※実際にディープリンパクトと戦ったアドマイヤジャパンやリンカーンの騎手が言っていました、ディープリンパクトのエンジンは他のウマと明らかに違うそうです。

「凄い…凄いよ!!あのお兄ちゃん!!物凄く速い!!」

その衝撃のデビューを見て、嬉しそうにはしやぐ小さな女の子が居た。この少女、サトノダイヤモンドがトレセン学園に入学するのは約3年後である。

変人記者とただ1人の親友

「『デビュー戦、全員勝利おめでとう!!』」

食堂の一角。そこでは数名の生徒達が集まっては小さなパーティーを開いていた。集まっていた生徒達はスペシャルウィークを含めた一団であり、セイウンスカイ、キングヘイロー、グラスワンダー、エルコンドルパサー、そしてディープリンパクトだ。いや、違う…人数が多く一つのテーブルでは収まりきれなかったのか、隣のテーブルにも参加者が集っていた。

「皆、デビューおめでとう!!私だって華麗にデビューを決めてやるぜよ!!」

隣のテーブルには数日後に高知の競馬場でデビューが決まっているハルウララ。

「ディープリ君、君のデビューはテレビで見たさ。ボクも華麗に負けていられないね」

グラスワンダーの後輩でチームリギル所属の男装少女、つまりディープリンパクト（男の娘）とは真逆の見た目をした美女ティエムオペラオー。因みにこう見えて、ディープリンパクトと同じくジュニアB組である。

「私だって…魔法を使って頑張るんだから!!」

魔法使いのような魔女っ子帽子を被った小柄な少女。彼女はスリープトウショウ。

自分を魔法使いと信じて止まないウマ娘であり、日頃から魔女つ子帽子を被っている。此方もジュニアB組。

ジュニアC組からはスペシャルウィーク、セイウンスカイ、キングヘイロー、エルコンドルパサー、グラスワンダーの5名。ジュニアB組からはディープリンパクト、ハルウララ、テイエムオペラオー、スイープトウショウの4名。合計9名のウマ娘が集まった訳だが、ジュニアC組の5人とディープリンパクトが無事にデビュー戦を勝利した記念である。

名馬と言われるウマ娘は沢山居る。だが、無事にデビュー戦を勝てるかと言われればそうではない。デビュー戦で勝てるウマ娘も居れば、同時にデビュー戦で勝利できず黒星スタートするウマ娘もその分居るのだ。

「次は弥生賞だね。皆はどうするの？私が出るつもりだよ」
「勿論、キングたる私も出ますわよ」

ジュニアB組であるディープリンパクト、テイエムオペラオー達は時間には未々余裕が沢山だ。しかし、ジュニアC組の子達はそうとも言えないのが実情だ。

何故なら一生に一度のクラシックが迫ってる為である。4月には皐月賞、5月には日本ダービー、秋には菊花賞がある。中3のクラシックは特別であり、誰もが夢を見る。トレーナーは勿論、学園の厩務員（此処では用務員や食堂スタッフ）、両親、当事者であ

るウマ娘、競馬に関わる人達の特別なことから。

※実際の厩務員はざっくり言うくと、競走馬の身の回りのお世話をしてもらえる人です。餌、ブラッシング等の清掃、日頃から競走馬の事を思ってくれる人達です。

「勿論、私も出るよ!!日本一のウマ娘に成るのが私の夢だから!」

スペシャルウィークの夢は日本一のウマ娘。その為にはやはりクラシックに出なければ成らないし、出来るならば勝ちたい。しかし、クラシックに出走出来るのは選ばれた精鋭18名だけ。その18名に入るためにはレースに出場し、知名度や人気を集めては実績を得るしか無いだろう。

「素晴らしい!!やはりサンデーサイレンスさん!!貴方は素晴らしい!!」

ウマ娘達の為に自分を犠牲にしてまで、彼女達の成長を助ける!!」

「いや…俺、そんな事一言も言っていないけど!」

一方のお父ちゃんことサンデーサイレンス。彼は職員室で1人の記者からインタビューを受けていた。その記者は若い女性であり、最近大学を卒業した位だと思われる。

「えーと…所でお嬢さん。貴女、名前は?」

「失礼しました！私、乙名史悦子と申します。主に別冊トウインクル等の取材や編集を行ってます」

記者の名前は乙名史悦子と名乗った。彼女はウマ娘達が日頃から活躍するトウインクルシリーズの事が乗った雑誌、別冊トウインクル等の取材や編集を行っている記者なのだ。

「別冊トウインクルの？ああ、スズカが良く読んでるトウインクルシリーズの雑誌のね」「はい！異次元の逃亡者と呼ばれるサイレンススズカさんも護愛読してるなんて、光栄です!!」

それはそうと、今年は注目株の選手が沢山ですよ？今年のクラシックはどうなると思いますか？」

やはり、聞いてくるか。サンデーサイレンスの脳裏にその言葉が過る。今年は当たり前とも言える程であり、スペシャルウィークの世代では誰がクラシックを制覇しても可笑しくない。セイウンスカイ、キングヘイロー、スペシャルウィーク、エルコンドルパサー、グラスワンダー、誰がその年の覇権を握るのか本当に分からない。これに関してはアメリカ二冠馬であり、サイレンススズカとゴールドシップを育てたサンデーサイレンスでさえも予想が出来ない。

「今年は誰がクラシックを制覇しても可笑しくない。それ程の当たり年だ。中でもセイ

ウンスカイ、キングヘイロー、エルコンドルパサー、グラスワンダー、あとスペシャルウィーク。本当に皆優秀だ。ただ…レースは走り出して終わるまで何が起こるか分からない。ただ、それでも個人としては娘の勝利を信じてる」

「やっぱり貴方は素晴らしいです!!サンデーサイレンスさん!!」

そして…サンデーサイレンスは指を一つ立てた。

「あと、今年の夏のプレオープン。奇跡が起こる。お楽しみに」

「ふっ…フジキセキが走った!?!」

ストップウォッチを持つゴールドシップが叫ぶ。無理もない、彼女の視線の先には多くの医者が投げ出した文字通りの奇跡が起こっていたのだから。

「マジで!?!マジで!?!マジかよ!!」

奇跡が起きれば人は心から震えるのだろう。ゴールドシップはストップウォッチを

止めるのを忘れ、大喜び。

いぎ、ゴールドシップも走り出して奇跡を起こした張本人の所に向かおうとした時だった。なにやら、気配を感じてゴールドシップは気配の方を向いた。

そこには光の加減で金色に見える茶髪をした小学生程のウマ娘、その小学生の手を優しく握る薄紫色の髪をした美しいウマ娘の美女が立っていたのだ。

そして…その美女はどういう訳か、ゴールドシップにとつては懐かしく感じてしまった。サンデーサイレンスに対してお爺さんと思ってしまった事と同じく、ゴールドシップはその美女をお婆さんのように思ってしまったのだ。

「あら、ごめんなさい。貴方はサンデーの教え子ですわね？何時も、活躍はテレビで見ますわよ」

「えっ？…どうも…アンタは？」

美女は笑みを浮かべて口を開く。

「私はメジロマックイーン。サンデーサイレンスの高校時代のルームメイトで、ただ1人の親友ですわ。」

この子はオルフェーヴル。訳有って、私が面倒を見ている子供ですわ」

美女はメジロマックイーン。子供はオルフェーヴル。なんだか分からないが、ゴールドシップは2人の事を他人とは思えなかった。

次期新入生、予約しまゝす

「メジロ？もしかして、ドーベルやアルダンの親戚ですか？」

突如として現れ、サンデーサイレンスの親友と名乗った美女メジロマツクイーン。そんな彼女と彼女が連れたオルフェーヴルと呼ばれた子供を見ながら、フジキセキはマツクイーンに問う。なお、フジキセキの隣では何か違和感を感じるのかゴールドシップが首を傾げたままだ。

フジキセキは今、ドーベルやアルダンと親戚ですか？と聞いた。これには訳がある。ドーベルとアルダンというウマ娘は共通してメジロという家名が着いているのだ。メジロ：かつて大きな栄華を誇ったステイヤール（長距離ランナーのこと）の一族であり、多くの有名ウマ娘を輩出してきた名家：いやだったと言うべきか。近年、メジロ家も嘗ての有力なウマ娘が10年程出てないためか、名前を聞く機会が少なくなってきた。

※史実でのメジロ家ことメジロ牧場は2011年に馬主業から撤退しています。主な理由として考えられるのは2度の火山噴火による被害（特に1977年の噴火）、所有馬の成績不振。スピード化していく日本競馬（サンデー一族の普及）の環境に置いていけず取り残されたとも言われています。

「はい。そうですね、そうとも言えますわね」

どこか寂しげな表情でマックイーンはそう言った。なにやら訳有りなのかも知れない。

「今日来ましたのはサンデーとお話が有りましてやって来ましたわ」

「爺さんに用が有るのか？ 爺さんなら職員室だと思うぞ？ 春の学園祭も近いし、その会議も有るしな」

しかし、サンデーサイレンスを含めた教員達はこの時期忙しい。日頃から担当するウマ娘達のコーチングやマネジメント等で忙しいのは勿論、今は4月に行われる学園祭の準備で忙しいのだ。トレセン学園の学園祭は年に2回行われる。春の学園祭と秋の学園祭だ。学園祭と言っても、正しい呼び方は感謝祭であり、この日は許可を取らなくてもお祭り気分です多くの一般客がやって来るのだ。

チームや個人、グループ事の出店や出し物、イベントの企画や準備に教員達は大忙しなのである。

「学園祭の準備で教員は忙しいからね。先生はトレーナーと教員を掛け持ちしてるし、他のトレーナーと違って学園祭の準備とかも有るからね。それに、今日は生徒会曰く雑誌の記者が来てるし…取材を受けてるかも知れませんが」

「ええ、承知してますわ。それでしたら、食堂かカフェテリアで待つのは宜しくて？」

「ええ、なんなら案内しますよ」

こうしてフジキセキとゴールドシップの案内により、マックイーンとオルフェーヴルはトレセン学園のカフェテリアに案内された。確かにカフェテリアならばドリンクや軽食も頼めるので、良い時間潰しには成るだろう。

カフェテリア。そこは授業中を除き、常に学生が寛いでは勉強したり友達と話したりして時間を過ごしている。そんなカフェテリアの窓際の一角には、来客であるマックイーンとオルフェーヴル、そして2人を案内したフジキセキとゴールドシップが座った。

「此処も随分と変わりましたわね。私が在学していた頃は、カフェテリアは無かったのに」

懐かしく、カフェテリアの内装を見回してそう言ったマックイーン。サンデーサイレンスの親友と言うことはサンデーサイレンスと歳が近いのだろう。ならば実年齢は30から40前後、卒業生だとすれば最低でも十数年前に在学していた事になる。十数年もすれば様変わりもしてしまうだろう。

「アンタ。このOG?」

「はい。その時の写真も有りますわよ」

ゴールドシップの質問に答えるように、マックイーンはポケットから大事そうに一枚の写真を取り出した。その写真には少女と言える過去のマックイーン、ディープリンパクト瓜二つの少年時代のサンデーサイレンス、そして黒いウマ娘の女性が写っていた。

「うお!? 爺さん、ディープそっくりだな」

「私達が高等部の頃ですね。サンデーはアメリカでの現役を終えると、トレセン学園高等部でトレナー免許を取るために転入してきましたの」

サンデーサイレンスとマックイーンはトレセン学園高等部からの知人だったのだ。

「あの…この人は?」

「ハイセイコー。私の恩師ですわ。元は優れた競技者で、チームが小規模でも何時も笑顔絶さない人でしたわね…今は隠居してますわ」

ハイセイコー。聞いたことがない名前を聞いて、フジキセキとゴールドシップは首を傾げた。無理もない…ハイセイコーは言わば、何世代前の選手だ。サンデーサイレンスが高等部の頃には既にトレナーで活躍していたとすれば、恐らく現役選手だったのは約50年ほど前に成る可能性も有るのである。若くて50歳程だがもしかすれば、マルゼンスキーよりも年上なのかも知れない。

だが、そこでフジキセキとゴールドシップは何か気付いた。それは写真に写る若きサンデーサイレンス達の後方に、何かが写っている事だ。それは何やらダンボールを組

み合わせた物のようで、ウマ娘のような耳を持ちキリンやオカピ等の動物らしさを合わせた謎生物の被り物が有ったのだ。

※この世界にウマ娘は居ても、馬は居ません。その為に我々が知る馬は、ウマ娘のよ
うな耳を持つキリンやオカピっぽい謎の生物と成ります。馬は居ないので、シマウマもア
フリカ在住のウマ娘と成ってます。

「えっ？なにこれ」

「おっと！それは言えませんわ」

『曲がれえええええええええ!!』『曲がれえええええええ!!』マックイーンの脳裏に思い
出す、サンデーサイレンスとハイセイコーとの青き春。その中には言葉ではどうしても
説明出来ない物も多々あるのだ。

「随分懐かしい写真だな。それ、あの人の夢を叶える為に奮闘した夏休みじゃないか」

声が聞こえ、マックイーン、フジキセキ、ゴールドシップは声の方を見る。自分達が
座っていた席の側にはいつの間にか、仕事を終わらせたサンデーサイレンスが立って
いた。

「よっ！マックイーン」

「元氣そうで良かったですわ。サンデー」

親友同士の再会。フジキセキとゴールドシップは一先ず、この謎の生物を模したダン

ボールの事を聞きたいが、それは叶わない。

「で？その子だな、マックイーン」

「ええ、来年。この子：オルフェーヴルがトレセン学園に入学したら、面倒を見てほしいのです。」

この子の素質は間違いなく、私を越えてます。必ず、現役だった頃の私より遥かに速い子に成る。貴方しか頼める人が居ないのですわ」

マックイーンが此処にやって来た訳は、早々にサンデーサイレンスにオルフェーヴルの事を頼むためだ。

優秀なウマ娘にはスカウトが付き物だ。サンデーサイレンスはアメリカに居た幼少期、スカウトに色々と言われた事がある。スカウトは優秀で素質があるウマ娘を見付けると、トレセン学園に入れたり、有力なトレーナーに紹介する事がある。

オルフェーヴルがスカウトの目に付けられる前に、マックイーンが信頼するサンデーサイレンスに予約するという事だ。

「勿論だ。宜しくな」

サンデーサイレンスはマックイーンの隣に座っていたオルフェーヴルを見る。すると、オルフェーヴルもサンデーサイレンスを見上げ、彼女は初めて口を開いた。

「ジジイ」

「ぶっはは!!ジジイ? ゴルシにも爺さんって呼ばれるけど、君とゴルシに言われたら悪い気はしないな!」

オルフェーヴル。彼女が黄金の暴君と呼ばれ、世界にその名を轟かせる事に成ることを未だ誰も知らない。

初めての大一番!!

「すまん!!フジキセキ。ちよつと、緊急の職員会議が入ったから練習遅れるわ。各員の練習メニューはもうスズカに渡してるから、それを見て皆をサポートしてくれ」

学園祭という大きな学校行事が有るためか、トレセン学園の教員はこの季節は忙しい。トレーナーは教員というより大学や高専の部活顧問に近く、厳密には教員ではないので職員会議に参加しなくても良い。だが、教員でもあるサンデーサイレンスは職員会議に出なければならず、この季節は練習メニューを教え子に渡しては会議に出なければ成らない事も有るのだ。

その為か、サンデーサイレンスは電話でスピカの最年長と成ったフジキセキに事を伝え、通話を切る。そして、職員会議に出るために会議室に向かつていった。

「はい了解ですよ……つ、切れた。教員とトレーナーの掛け持ちって大変なんだね」

一方の部室。サンデーサイレンスは職員会議で来れないが、既に授業を終えたチームスピカの面々は集まって準備をしていた。既に全員、ジャージ姿に着替えており準備万端である。

「じゃあ、スズカ。本日のメニュー宜しく」

「はい。フジキセキさんは夏の復帰レースに向けてのメニュー、私は5月のヴィクトリアマイルに向けて、ゴールドシップさんは5月頭の天皇賞（春）に向けて、ウオッカさんとスカレットさんは明日のデビュー戦に向けての調整」

と：サイレンススズカは事前に渡された練習メニューが書かれた紙をメンバーに渡していく。とは言え、この練習メニュー：実はメンバー個人個人の為にサンデーサイレンスが考えているが、変えても良い。ウマ娘や人間の体調や気分はその時その時で変わるものであり、サンデーサイレンスはそれを現役時代から知っている。

故に彼は多少の自主性を認めており、各員が物足りないと思えば自分達で追加したり、逆に此処を変えたいとすれば変えても良いのだ。

奇跡を起こして再び走れるように成り始めたばかりのフジキセキ、明日にデビューが控えたダイワスカーレットとウオッカは調整に適したメニューと成っている。

「なんか…物足りないぜ」

「試合前日に追い込むのは止めた方が良いよ、明日に響くからね」

レース前日は基本的に軽めのメニューで調整する。その事にウオッカは少し不満げだが、これをフジキセキが宥める。確かに物足りないメニュー内容ではあるが、疲労が抜けずに明日に響く事を考えれば従う方が良いだろう。

「それで、これがスペちゃんと言い、ディープ君のメニユー。スペちゃんも明日に弥生賞があるから軽めの調整、ディープ君は当分レースは無いから年末のホープフルステークスを見据えたメニユーみたいね」

スペシャルウィークは明日には重賞レースの1つ、G2の弥生賞が迫っている。デビュー戦とは違い、多くの観客がスタンドは勿論のこと画面越しに観戦するだろう。しかし、この弥生賞で結果を残せばクラシックに優先的に出場する事が出来るかもしれないのだ。

そして我々がディープインパクトは12月末までレースは無い。その為かガッツリとトレーニングを行うことが出来る。来年からはクラシックにも参加するためか、それを見越したメニユーも含まれているだろう。

「弥生賞ですか…」

「G2とは言え、スペは初めての重賞だからね。クラシックに挑むなら弥生賞は大きなレースに成るよ」

フジキセキが言う。そう、三大クラシックに出るならば弥生賞は大きな意味を持つレースに成るのだ。三大クラシックは中3のウマ娘…その中でも選ばれた18名しか出ることが出来ないレースであり、皐月賞、日本ダービー、菊花賞の3つの事である。

「折角だし、弥生賞の事を教えよう」

するとフジキセキは部室に有ったホワイトボードに水性ペンで、弥生賞の時に走るレースの図面を描いた。

「弥生賞は一周し、もう少し進んだ所にゴールが有る。だけど、スタートとゴール地点の間の所に心臓破りの坂が有ってね。序盤とゴール寸前、この坂でスタミナを多く消費してしまふんだ」

フジキセキが描いた図面。弥生賞は一周して、少し進んだ所にゴールがある。しかしスタート地点とゴール地点の間には上り坂が有り、スタート直後とゴール寸前の2つにこの上り坂をどう攻略するのが鍵になる。

「坂ですか?」

「そう、坂。スタート直後の上り坂は問題なく行けるかも知れない。だけど、問題は一周してゴール寸前の上り坂だね。消耗しきった状態でこの坂を登るわけだから、多くの選手が失速するんだ。毎年ね」

順調にレースを進めていても、この最後の上り坂で失速する場合がある。そうなればゴール手前で抜かされてしまう場合も有るだろう。そう成らないためには、根性が物を言うのかも知れない。

「そして弥生賞は来月のクラシック第一戦である皐月賞と条件は全く同じ。弥生賞の結果が、現時点での皐月賞の結果に結び付く。だからクラシックを目指すならば非常に大

事に成るよ」

弥生賞と皐月賞は全く同じ。つまり、弥生賞の結果が皐月賞に繋がるのだ。当然、三大クラシックを制覇するならば皐月賞は必ず突破せねば成らず、重要なレースと成るのだ。

「クラシックですか…」

中3の1年間しか走ることが許されない特別なレース。日本のウマ娘の出生数は年間約7000人、その7000人の中でも選ばれた18名だけが走れるクラシック。当然、スペシャルウィークもその重さを知っている。

「私は怪我をして走れなかった」

「私もクラシックじゃ結果を残せなかったの」

三大クラシックは特別なレース。強くても結果を残せるかどうかは分からない。事実、フジキセキは怪我で走れず、サイレンススズカもクラシックでは結果を残せなかった。

「アタシは皐月賞と菊花賞は勝ったが、ダービーはダメだったな」

ゴールドシップさえも二冠は達成できてもダービーはダメだった。それが三大クラシックである。

「お姉ちゃんさ、日本一のウマ娘に成るんでしょ？ だったら三冠馬目指してみたら？」

「ディープちゃん!？」

弟に言われた通り、スペシャルウィークの目標は日本一のウマ娘。ならば、三冠馬に成るのが近道と言えるだろう。

「目標は大きい方が良い!!スぺ!!アタシとフジキセキが成れなかつた三冠馬…成つてくれよ!!成れなくても、やっぱダービーだ!!男と言ったらダービーだ!!」

「ゴールドシップさん!!私、女の子ですよ!!」

※史実のスペシャルウィークとゴールドシップはご存知、男です。

そして弥生賞が始まる。

「凄いお客さん…デビューとは違う」

初めての重賞。スタンドの熱気はスペシャルウィークとディープインパクトが経験したデビューとは違い、多くの観客が集まっていた。

「セイちゃん、キングちゃん…」

緊張気味なスペシャルウィーク。彼女の視線の先には共に弥生賞に参加するセイウンスカイ、キングヘイローの姿があつた。今回、人気予想ではキングヘイローが一番人

気、セイウンスカイが二番人気。スペシャルウィークが三番人気な事から、世間の評価としてはキングヘイローが一着になると予想されているのだ。その為か、キングヘイローは参加者の中では一番余裕そうだ。

一方のスタンド。

「サンデー先生。スベ先輩勝てそう?」

「分からん。ぶつちやけ、誰が勝つても可笑しくない。中でも要注意すべきは、キングヘイローよりセイウンスカイだな」

無事にデビュー戦を勝ったウオッカとダイワスカーレットと合流したチームスピカの面々がスペシャルウィークを見守っていた。

「俺、個人の評価だが…セイウンスカイはクイーンベレーやコンゴウリキシオーと同じ逃げが得意だが、その2人よりも強いだけでなく、相手のペースを乱すことがうまい。」
セイウンスカイは逃げ、キングヘイローは差しを得意とする。

「セイウンスカイのペースに吞まれスベがペースを乱してしまえば、負ける可能性が高い。だが、逆にペースを乱さなかったら勝ち目は普通に有るって所だな」

そして…遂にレースが始まった。

『おおうと!?!先頭は行くのはセイウンスカイ!!快調に飛ばしていく!!』

始まったばかりのレース。開幕早々、飛ばして逃げるのは二番人気のセイウンスカイ。逃げ足で逃げてリードという貯金を作っていく。

「速い!?!」

これにはスペシャルウィークは驚くが必死に自制し、自分のペースを保つ。冷静さを失って此処で食らい付けば、間違いなく後半は持たない。だから、必死に自制する。

「レースは最後まで何が起こるか分からんぞ。そうだ、自分のペースを保て。お前は俺やスズカみたいに逃げは出来ない。だから、自分のペースを保って最後に全身全霊を用いて抜き去れ」

聞こえるかは分からない。けれど、サンデーサイレンスは娘に声をかけずには居られなかった。レースはどんどん進んでいき、一周した頃だ。セイウンスカイに必死に着いていこうとした人達はスタミナが消耗し、疲れが見えだした。この状態では間違いなく最後の上り坂では急激に失速する。

『先頭はセイウンスカイ!! 続いてキングヘイロー!! そしてスペシャルウィーク!! さあ、心臓破りの坂だ!! 誰が先頭に出るか!?! それともセイウンスカイが逃げ切るのか!!』

実況の声が響く。先頭を走るのはセイウンスカイ。2番手のキングヘイローとの差は二馬身。誰もが逃げ切ると思った。しかし、スペシャルウィークは此処で仕掛ける。

誰もが失速する心臓破りの坂で、仕掛けるしか勝機は無いのだから。

『スペシャルウィーク!? 此処で加速した!!』

「いけ!! スペ!!」

「スペ先輩!!」

「お姉ちゃん!!」

「そこだ!! そこで仕掛けろ!!」

全身全霊を以てスペシャルウィークは速度を上げる。勿論、不馴れな坂でどんどんスタミナは奪われるが…父と内面が似た少女の根性ではそんな物は関係無い。

『スペシャルウィーク!! キングヘイローを抜き去った!! ゴールは目前!! どうなる!!』

ゴールまで残り僅か。だけどスペシャルウィークの全身全霊は終わらない。

スペシャルウィークはゴール寸前にセイウンスカイを差しきつて、無事にゴールしたのだ。

スペシャルウィーク。初めての重賞を制覇する。

「スペのヤツ…上り坂が苦手だな。ストライドを巧く変えてない。皐月賞までに坂の対策だな」

そして父親は娘の欠点を見付けては指導を決意する。

飯テロ アメリカンBBQ 下拵え

BBQ…それは食のロマン。アメリカのパーティーでは良く行われ、日本でも馴染み深い。しかし、多くの日本人は知らないのだ。アメリカなBBQと日本のBBQは全くの似て非なる物であると。

スペシャルウィークが弥生賞に勝った翌日。サンデーサイレンスはサイレンススズカ、ゴールドシップを連れてシヨツピングセンター…いや、規模からすれば巨大倉庫と言える程のお店にやって来ていた。

その店の名前はコストコ。アメリカ発祥の大型シヨツピングセンターであり、ぶっちゃけ倉庫、規模アメリカンを地で行くシヨツピングセンターである。

「やっぱりBBQの買い物と言ったらコストコだな」

「BBQなのにデツカイ肉買うの、爺さんとタイキ位だろ」

実はと言うとサンデーサイレンス。機会があれば教え子を誘ってはBBQを行うことが多い。年に1度は教員達も誘ってBBQを行う程のBBQが大好きなのだ。しかし、サンデーサイレンスが行うBBQは日本風のBBQである焼肉のような物とは少し違う。勿論、手早く食べられるように焼肉スタイルも取り入れているが、メインはアメ

リカンなのだ。

「先生がやるBBQって日本人の想像を越えてますからね」

陳列された商品を見ながらサイレンススズカは思い出す。彼女が初めて重賞を勝った時だった。サンデーサイレンスは我が子のように喜び、サイレンススズカとゴールドシツプは勿論のこと、サイレンススズカの友達も誘ってはBBQを行った。

しかし、行われたBBQはサイレンススズカの予想を越える物であり、唯一サンデーサイレンスのBBQを瞬時に理解できたのはサイレンススズカの同級生でありアメリカ出身のカウガール：チームリギル所属のタイキシヤトルだけであった。

『オーウ!!YES!!先生、分かってマース!!』

『BBQと言ったら、これだろ?Tボーンステークがもうすぐ焼けるな。ブルドポークバーガー食べる人!!』

味は滅茶苦茶旨い。しかし、サイレンススズカの良く知る焼肉のようなBBQではなかった。

『ステークはダイエツト食材!!』

『オフコース!!』

ステークはダイエット食材。サンデーサイレンスの常識である。

※ステーク単体なら炭水化物は少なく、タンパク質なのでステーク主食でライスとパ

ン抜きなら炭水化物ダイエットは原理上出来ませぬ。しかし、お米が恋しくなります。

「おっ！皮着きの豚が有るじゃないか。毛の処理もちゃんとされている。これにするか」

するとサンデーサイレンスは何かを見付けたのか、それを買ひ物籠に入れた。サイレンスズカがそれを確認すると、それは皮着きの豚の一枚肉だった。それを3枚：サンデーサイレンスは籠に入れたのだ。

「スピカ以外も参加するかも知れないし、少し多めに買うか。スぺの事も考えれば軽く10人前は最低要るな」

「どんだけスぺ食べるんだよ」

サンデーサイレンス。毎度のBBQで諭吉が消えていく。しかし、教え子達が可愛いので問題はない（大人連中とやる場合は割り勘）。

翌日。その日は祝日であり、授業はない。レースも無く、多くのウマ娘は休日を満喫したり自主練習を行っている。

午前10時。先日にデビュー戦を勝利し、白星スタートを成し遂げたウオツカとダイワスカーレットは仲良くジョギングを行っていた。

「それにしても、此処って広いわね」

「普段、オレ達は此方に来ないからな。しかし、マジで広いぜ」

トレセン学園の敷地は広い。中等部と高等部は同じ敷地に有るが、その敷地だけで下手な大学より遥かに大きい。更に競技場さながらのトレーニングコースも有るのだからその大きさが分かるだろう。

道路を渡った先もトレセン学園の敷地であり、そこには学生達が日頃から過ごす学生寮、そこから離れた所にはトレーナーや教員に厩務員が暮らす社員寮が有るのだ。そして其処から更に進むと、人間の学生も通える大学部が有るのだ。

2人は学生寮の区域を抜けて社員寮の所にやって来る。社員寮と言えど、学生寮と違って1つ1つの部屋も大きい。駐車場も完備されており、駐車場には教員やトレーナー達が所有する自動車が駐車されていた。

「子供達の声も聞こえるわね」

「若い職員さんの家族じゃねえの？社宅の方が家賃が安いしな」

社宅は家賃が安い。何より家族との同棲も認められている。使わない手は無いだろう。

その時だった…ウオッカとダイワスカーレットの鼻に香ばしく、美味しそうな香りが入ってくる。匂いとしたはイタリア系に近いのか、身近で例えるならピザポテトだ。

「ねえ、ウオッカ…ピザポテトの匂いしない？」

「してるな…マジでピザポテトにちげーな」

未だ10時とは言え、そんな匂いを嗅いでしまえばお腹が空いてきてしまう。しかし、匂いが気になるのか2人は匂いの方に向かっていった。

そして匂いの所に辿り着くと…

「先生!?!なにやってるのよ!?!」

「BBQの下準備だよ。BBQラブの配合も合わせると、俺は朝6時から準備してるんだよ」

朝日に照らされたサンデーサイレンスが調理用手袋を両手にはめて、皮着きの豚肉に粉末の調味料をたっぷりと塗り込んでいた。

この調味料からピザポテトの匂いができており、もしかしたら調味料に秘密が有るのかもしれない。

「えっ?! BBQって外で食べる焼肉だろ?」

「ちげーよ。今日、マジでBBQを教えてやろう」

今日…2人は真のBBQを知る。

「ビアカンチキンが焼けるまで、後2時間か」

アメリカのBBQは時間がかかります。サンデーサイレンスの側には蓋着きのBBQグリルが3つ存在しており、その1つからは香ばしいピザポテトの匂いがしていた。